別紙様式３（修士申請者用）

（西暦）　　2022 年度　博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名（注：学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること）

回復期リハビリテーション病棟に入院した脳卒中患者が

主観的回復感を感じるに至るプロセス～TEA による分析～

学位の種類：　修士（作業療法学）
東京都立大学大学院
人間健康科学研究科　博士前期課程 人間健康科学専攻　作業療法科学域
学修番号 21896706
氏　名：道願正歩
（指導教員名：大嶋　伸雄　教授　　）

注：1 ページあたり 1,000 字程度（英語の場合 300 ワード程度）で、本様式 1～2 ページ（A4 版）程度とする。

本研究では，回復期リハビリテーション病棟に入院した脳卒中患者が「主観的回復感を感じる」に至るプロセスを明らかにすることを目的に，複線径路等至性アプローチを用いて分析を行なった．研究対象者は男性 1 名，女性 2 名の計 3 名であった．共通点は，①家族との同居，②無職，③アテローム血栓性脳梗塞，④入院時日常生活活動の身体的介助を要する，⑤中等度から重度の運動麻痺を呈しているであった．3 名の対象者に対して，計 3 回のインタビューを実施した．複線径路等至性モデリングの概念ツールの定義と，分析の結果から得られた本研究における意味づけから，3 名の研究対象者の統合された「主観的回復感を感じる」という等至点に至るプロセスが示された．プロセスでは，急性期病棟から回復期リハビリテーション病棟にかけての病棟生活環境で，時期に応じて研究対象者の行動・認識は変化しており，リハビリテーションの進捗や医療職ならびに家族との関わりが影響していた．リハビリテーションの進捗では，トイレの身体的介助，転倒に対する恐怖感が等至点に至ることを阻害していた．また，家族との関わりでは，家族と自由に連絡を取れない病室環境が等至点に至ることを阻害していた．一方で，歩行訓練にて自身の変化を感じ，等至点に至っていた．その中の医療職との関わりでは，医療職からの対象者に対する病棟生活やリハビリ中の言葉が等至点に至ることを後押ししていた．また，家族との関わりにおいても，家族からの電話を介しての言葉が等至点に至ることを後押ししていた．対象者全員が「野鳥の撮影に行きたい」，「北海道にトレッキングに行きたい」，「孫の卒園式に出席したい」と退院後の希望を語るに至った．さらに，その中途において，研究対象者は主観的回復感を感じないに至る経験もし，リハビリテーションの進捗を通して「完全な回復は難しいと感じる」に至った．その後，対象者いずれもが 2ndEFP として「退院後の新たな生活を想像する」に至った．主観的回復感を感じる，主観的回復感を感じないの 2 つに至る経験の中で，研究対象者の価値・信念は「機能回復を切望する」から「回復に沿って退院を想定した生活行為に取り組む」に変化した．以上より，脳卒中患者が退院後の新たな生活を送るためには，心理的側面に配慮しながら発症時期に応じた包括的な支援を（家族も含めた）多職種連携で行うことが，重要であると考えられた．